

立教大学大学院 社会デザイン研究科

SOCIAL DESIGNER

日本初!〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

Vol.
38



・ CONTENTS ・

インタビュー

社会をつくる技術としてのアート:
「災間」と優しい社会
〈佐藤 李青 先生〉

キャンパスの声

私たちソーシャルデザイナー!!

修了生の声

活躍してます! 修了生

新刊紹介

Social Designer's
Library

講演会・シンポジウム情報

研究科イベントレポート

お知らせ

MSDA News

INTERVIEW

SATO RISEI OKUMA GEN

佐藤 李青 先生



大熊 玄 先生

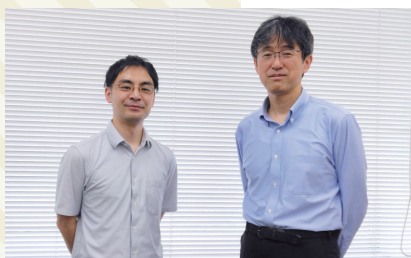


社会をつくる技術としてのアート： 「災間」と優しい社会

アート／アーティストとは

大熊 今日はよろしくお願いします。まず、佐藤先生が4月に着任されてから4カ月が経ちましたが、これまでのご経験やお立場から、着任前に「社会デザイン」という言葉で思い描いていたことや、着任後にそれが何か変化したかなどについてお聞きしたいと思います。

佐藤 私はアートや文化に関わる活動を仕事としてきました。アートといってもジャンルや作品の話というよりも、アートが社会に関わり、社会を作っていくひとつの技術であるにとらえてきました。アートは社会をデザインしていく手法のひとつでもあるとも言えられます。そういう意味で普段考えていること・実践していることと社会デザインという言葉との距離はそんなになかったです。着任後に、みなさんの話を聞いていると、それぞれ自分なりの形で社会に対する違和感や自身の実践を、研究としてとらえなおして、それはこれからの社会をデザインすることを考えることでもあるし、社会はどのようにデザインされてきたのかを問うこ



佐藤 李青 (さとうりせい)

立教大学大学院社会デザイン研究科特任准教授。専門は文化政策、文化行政、アートマネジメント、災間文化論。災禍のなか(=災間の社会)を生きのびる術としてのアートの可能性や記憶継承にまつわる実践と研究を行う。(公財)仙台市市民文化事業団災害文化創造ディレクター。一般社団法人associations代表理事。

大熊 玄 (おおくまげん)

立教大学大学院社会デザイン研究科・文学部教授。石川県西田幾多郎記念哲学館副館長。専門は、東洋思想、日本哲学(西田幾多郎、鈴木大拙)。思想研究に加えて社会に開かれた哲学対話の実践をしている。著書『善とは何か』『実在とは何か』『純粋経験とは何か』『宗教とは何か』『鈴木大拙の言葉』『はじめての大拙』等。

とでもあると思います。その点、社会デザインという言葉のもとに行われている研究や実践について、あまり違和感はなかったです。

大熊 先生は、文化事業のなかでもアートプロジェクトとよばれる領域で仕事をされています。最近アートという言葉は、いろいろな広い意味で使われていますね。

佐藤 はい。これまでアートプロジェクトの仕事をしてきましたが、まさにアートという言葉を広い意味で使うところまでやってきました。

大熊 そうなのですか。

佐藤 アートという言葉のもつイメージを変えたり、アートという言葉を使わずに成立させたりするような現場が多かったのです。地域のなかで行う場合、必ずしもみんながアートだと思って、その場にいるのではないこともたくさんあります。アーティストとの作品づくりというよりは、人と人の「あいだ」にアートがあることでコミュニケーションが生まれたり、そういう場を作ること自体がアートであるととらえるアーティストと一緒にやってきたことが多いです。アートが人と人とが会おうきっかけや口実になったり、そういう場自体をひとつの表現としてとらえるようなことをいっているのので、アートという言葉を非常に広く捉えています。私自身もアートでの被災地支援に関わってきましたが、「被災地」での人と人との関係を編みなおしたりすることにも、アーティストが力を発揮していました。

大熊 そのアーティストというのは、一般の人びとがイメージしているアーティストではないのですよね。

佐藤 そうかもしれません。2011年の東日本大震災以降、そのように社会と関わり、人と人との関係を相手取るアーティストの動きがとても早かったです。

大熊 これまではコーディネーターやファシリテーターなど異なる言葉がありましたが、アーティストがそれに近い動きをするようになったのはいつ頃なのでしょう。

佐藤 日本だと、ここ30年くらいが顕著だと思います。

大熊 もうそんなに歴史があるのですね。

佐藤 1995年の阪神・淡路大震災のとき、多くのアート関係者は「何もできなかった」と感じたそうです。それはおそらく、戦後、国内で遭遇した、ほぼ初めての大きな災害だったということもあると思うのですが、表現の形も、アートの技術を用いて社会デザイン的に関わっていくようなアート

のあり方がまだそれほどなかったからだとも思います。その後、2000年代くらいにかけて、各地で芸術祭や地域のなかに入っていくアーティストが増えたこともあって、そのような表現が増えていったのです。東日本大震災のときに、アーティストたちが避難所や仮設住宅など早い段階で動いたのは、そのような表現の変化が背景にありました。

災禍のなかを生きる私たちとアート

大熊 この雑誌のタイトルは「ソーシャルデザイナー」ですが、先生のおっしゃるアーティストというのは、このソーシャルデザイナーとほとんど同じように聞こえてきます。

佐藤 このようなアーティストの動きをふまえて、私自身、自分なりのサイズで社会を作る術としてアートをとらえるようになりました。ファシリテーションというと、いわゆる言葉を円滑に駆使するコミュニケーションというイメージがあります。そうではなく、みんなで編み物をしたり、絵を描いてみたり、そういう作業をあいだに挟んでみると自然にコミュニケーションが生まれてくる。そこではアートの領域で培われてきた様々な技術が発揮されているのですよね。そうしたコミュニティが生まれる風景は社会の始まりのようにも思えます。社会を作ることは、社会変革のような大きな動きだけではありません。そのように目の前の人たちとの関係を従来の社会関係とは違うものとして編みなおして、そこから積み上げていく社会のつくり方もあるのではないのでしょうか。アートの領域で培われてきた技術が発揮される場とは、従来の社会を作るやり方とは違うあり方を生んだり、そこからこぼれ落ちる人びとの声を拾ったりすることができるのだと思います。

大熊 たとえば歴史や文学などと結びついた地域おこしの事例がありますが、それは先生がおっしゃるようなアートプロジェクトとは少しずれる気がします。そうすると、先生が実践されているアートプロジェクトの特徴とは何でしょうか。

佐藤 活動が始まるときにアートという言葉を入力にしないことも多いです。東日本大震災のときも、アーティストが、まずはボランティアや支援者として現地に入ることも多かつ

たのですね。あれが必要だね、これが必要だねと話していくなかで、みんなで喫茶店のような場を作ったり、それが小さなお祭りのようになっていくといったことがありました。そうすると、だんだんとアーティストであることがみんなに知られていきます。でも、その場には、しっかりとアートの領域で培われた技術が生かされているわけです。人と人とが普段とはちょっと異なる出会い方をする。それぞれが仕事など社会的な立場を明かさずとも「人と人」として出会い、そこからあの人はあれが得意だねとか、実はあの人はああいう仕事をしているのだよというふうに出会っていく。通常は、どの会社で働いているかなど、社会的なラベルから先に人と出会うことが多いかと思いますが、何か一緒にやってみる出会い方があると、いちどそうしたラベルを脇に置いてやりとりを始められるわけです。それは、とくに「被災者」などのラベルを貼られる震災の現場においては、とても重要だったと思います。

たとえば、福島県の復興公営住宅での「ラジオ下神白」という活動がありました。文化活動家のアサダワタルさんらが、住民の人たちに思い出の音楽について話を聞いてまわり、それをラジオ番組風に編集し、また住民の人たちに届けていくものでした。数年の活動を通じて、集会所のクリスマス会で、住民の方の思い出の曲をみんなで歌う「うたごえ喫茶」も行いました。音楽があいだにあることで、「被災者」ではなく、ある年月を生きてきた、それぞれの人生が交錯していくような活動でした。



映画『ラジオ下神白 一あとき あまの音楽から いまここへ』の一場面より
©KOMORI Haruka + Radio Shimo-Kajiro

大熊 さて、もうひとつお聞きしたいのは、先生がおっしゃっている災禍のなか(=災間の社会)という言葉についてです。日本列島に生きている人は皆そうならざるを得ませんが、私たちは災害と災害との間にいるという感覚、いつか来る／また来るという感覚をもち続けることはとても大切であると私も思っています。

佐藤 「災間」という言葉は、もともとは災害と災害との時間的な間をさし、本研究科でも兼任講師をされている仁平典宏先生が使われた言葉です。災害の後に顕在化する課題は、その災害が発生させたものではなく、そもそもその社会が内包していた課題が露呈したのであって、「後」ではなく「間」という視点をもつことによって今の社会のありようを変えることができるのではないかというものでした。私自身は、東日本大震災後に東北と関わるなかでこの言葉に出会いましたが、今これだけ同時に様々なところで災害が起こり、ひとつの場所が復興する前に次の災害が起こるというのは、もはや常に災害の「なか」にいる状態です。ですので、この「間」は「なか」という言葉に読みかえられるのではないかと、私たちは災害の「なか」にいるという社会認識のもとで物事を考えていくことが大切なのではないかと考えて、災間という言葉で再定義して使っています。私は文化やアートでの関わりに可能性があると考えていますが、それは災害だけでなく、社会のなかで何らかの痛みをもつ人々に対する想像力や、そこに関わろうとする態度を作るものだと思います。その痛みとは、はっきり目には見えないものもあるでしょうし、必ずしも開示される必要もありません。隣にいる人に、そこまでの想像力をもつことができれば、優しい社会になっていくひとつの視点になるのではないかと思います。私自身は災害が軸になっていますが、必ずしも災害のことだけではなく、よりよい社会を今この状況で作っていくためにはどうすればよいかということ、を、災間という言葉の切り口にすることで自分なりの関わりが作れるのではないかと考えています。

大熊 私たちは災いのなかに生きている、思い通りにはならない社会に生きていることを標準として考えるのは、社会デザインとしては普遍的なテーマですね。今日はありがとうございました。

・ 私たちソーシャルデザイナー!! ・

VOICES
of GRADUATE
STUDENTS竹内
舞央
さん

MAO TAKEUCHI



研究と実践の中で

大学院での学びを通して感じたのは、さまざまな人々の営みを知り、経験し語り合うことの楽しさです。文献を読み、調査を重ねることはもちろん重要ですが、それ以上に、社会との接点の中で問いを深めていく姿勢が求められると実感しています。

私は大学院で文化やコミュニティに関する研究に取り組む一方、NPO法人東京レインボープライドでステージ企画制作ディレクターとして、多くの人が集い、互いを尊重できる場づくりにも携わっています。イベントでは、一つの企画を実現するために多様な立場の人々と対話を重ね、異なる価値観を調整しながら形にしていきます。その経験は、研究においても一つの視点だけでは物事を理解できないことを教えてくれました。

大学院では「正解」を探すよりも、「問い」を立てるものの難しさと面白さを日々感じています。そして、研究で得た視点は実践の現場へ、現場で得た気づきは再び研究へと還元され、新たな問いへとつながっている気がします。

研究と実践は別々のものではなく、互いを支え合い、視野を広げてくれる存在です。これからも大学院での学びを大切にしながら、多様な人々が安心して関わり合える社会の実現に向けて、自分なりの問いを持ち続けたいと思います。

文化やコミュニティに関心を持ち、現在は大学院に通いながら特定非営利活動法人東京レインボープライドでステージ企画制作ディレクターを務める。研究と実践を往還しながら、多様な人々が共生する社会について学んでいる。博士前期課程2年、西井ゼミ所属。

学びを高く、深める場

地方紙の記者を37年間務めた。好きな仕事だっただけに、定年の際の喪失感は大きかった。これからの身の振り方を考える中、たまたま手にしたのが、むのたけじ氏の『詞集たいまつ!』（評論社）だった。敗戦の日に戦争報道の責任を取って朝日新聞社を辞め、101歳まで健筆を振った硬骨のジャーナリストの著作だ。その中にある「学ぶことをやめれば、人間であることをやめる。生きることは学ぶこと」との記述が目にとまった。還暦を迎えてからの進路を決めたのは、そんな言葉に背中を押されたからなのかもしれない。この研究科は刺激に満ちている。仲間の年齢は20代から70代までと幅広く、実務経験を持つ教員がそろっている。どの授業でも活発な議論が交わされ、一人だけの思索では得られないような多様な視点や価値観が、日々の学びに組み込まれていく。講義を聞きながら、むの氏が残した別の言葉を思い起こすことがある。「学ぶ営みは一人ではじめて、一人へもどっていく。はじめた自分と、もどっていく自分とのあいだに、たくさんの人がはいればはいほど、学んだものは高くなり深くなる」。その意味を実感する毎日だ。学びは最終的に、個々の生き方へと昇華していく。修了時には、私自身の社会へのまなざしも、より高く、そして深く確かなものへと更新されているに違いない。

富山県出身。1988年に地元の新聞社に入り、文化部や政治部、論説委員室などで勤務。

富山の農をテーマにした連載「千五百秋（ちいおあき）」に、第28回農業ジャーナリスト賞を受賞。趣味は登山と古書店巡り。博士前期課程2年、滝口ゼミ所属。

鶴木
義直
さん

YOSHINAO TSURUKI

平野
由記
さん

YUKI HIRANO



研究は悩みも解きほぐす

研究では「宮崎県婦人会館」という60年前に建設された半公共施設をフィールドに、アクションリサーチを行っています。初めは、自分の生活圏にあるこの建物が活用されていない点に注目し、地域の交流拠点として復活できたらと思い研究対象にしました。入学後、経済、ジェンダー、公共、政策、福祉、哲学、サブカルチャーに及ぶ多様な講義を通して、社会に対する様々な視点を獲得することができました。それらのレンズを通して、今では婦人会館から多くのテーマを読み取っています。戦後の女性たちが担ってきた地域と家庭のケア、女性の社会進出と性別役割規範による妨げ、高度経済成長に伴う社会変容と生活を守るための市民活動、ゆれる政策に翻弄される人々のとまどい、共同体からの開放とつながりの希薄化…などです。入学前、私は地方における働き方や、仕事と子育ての両立に悩んでいました。多くの問題を自己責任化していましたが「問題の外在化」という言葉と出会い、トンネルを抜けました。婦人会館にも過去、私と似た人々がいたと感じます。会館を立ち上げた彼女たちが何を思い、今を生きる私たちは何を更新できるのか。研究と大学での学びは、過去と現在、社会と個人を行ったり来たりしながら、私自身の悩みも解きほぐしてくれています。

宮崎県在住。九州芸術工科大学（現：九州大学）芸術工学部卒。広告デザイン事務所勤務を経て独立。

地域福祉や児童福祉に関するデザインに携わる中で、社会デザインの可能性に魅力を感じ入学。博士前期課程2年、丸山ゼミ所属。

防災から広がる学び

中国の大学に在学していた頃、2021年に発生した鄭州の洪水について知りました。大規模な災害が人々の日常を一瞬で変えてしまうこと、また災害後の回復には、平時から整えられた防災政策や支援体制が重要であることを強く感じました。それ以来、災害時に困難を抱えやすい人々や、地域の防災の制度に関心を持つようになりました。日本には多くの災害経験と、それに基づく防災の制度や実践があります。社会デザイン研究科で学ぶ中で、防災は単なる災害対応ではなく、地域社会のつながり、多文化共生、行政制度、生活者の視点と深く関わる課題であると考えようになりました。現在は、外国人を支援される側としてだけでなく、地域防災を支える主体として捉える視点から研究を進めています。大学院生活では、先生方や同級生に多く支えられています。研究だけでなく、日々の生活の中でも温かく助けていただき、留学生の私にとって大きな安心感となっています。また授業では、防災リスク、企業の社会的責任、ジェンダー、多様性、気候災害の分類と予防など、幅広い知識を学ぶことができます。毎回の授業を通して、新しい視点から社会を見直す楽しさを感じています。今後も本研究科での学びを大切に、誰にも安心して暮らせる地域社会を考え続けていきたいです。

中国の安徽省出身。2023年に中国の大学を卒業。来日し、外国人消防団員をテーマに、地域防災と多文化共生の関係について研究している。

災害時に誰もが支え合える地域社会のあり方に関心を持つ。博士前期課程2年、長坂ゼミ所属。

汪
学龍
さん

XUELONG WANG



変わったのは、自分自身

古田 島 崇 さん

TAKASHI KODAJIMA

2026年
3月修了



10年前、他職種での経験を経て、父の家業である保育園経営に携わるため、故郷・新潟市へ戻りました。当時、園では子どもたちが楽しそうに過ごしている一方で、園と地域社会との間にどこか距離があるように感じていました。子ども、保育者、保護者、地域が自然につながり合い、コミュニティの中で子育てや保育が営まれる姿を実現したい。その思いが、私の学びの原点でした。

保育については素人だった私は、保育という専門分野だけでなく、社会やコミュニティという視点から保育園を捉えたいと考え、社会デザイン研究科へ進学しました。研究科では、多様な授業に加え、ゼミでの対話や院生同士の交流を通して、論理的な思考だけでなく、人との関わりや感性の大切さについても学びました。研究テーマは「保育園と地域の関係性」でしたが、在学中に最も大きく変わったのは、自分が経営する法人や園そのものでした。地域とのつながりを意識した実践が増え、園の雰囲気や地域との関係性が変化していくことを実感しました。

当初は、大学院での学びの成果は卒業後に現れるものだと思っていました。しかし、その変化は在学中から

組織に現れ始めていました。なぜ変化が起きたのか自分では説明できずにいたとき、指導教員から「何よりも変わったのは、古田島さん自身ではないですか」という言葉をいただきました。その一言で、大学院での学びを通して、自分自身の考え方や行動が大きく変わり、その変化が組織にも広がっていたことに気づきました。大学院では、知識や理論を学ぶだけでなく、学ぶことによって自分自身が変わり、その変化が周囲にも影響を与えていくことを実感しました。

在学中は、3人の子どもを育てながら仕事と学業を両立する日々で、決して楽ではありませんでした。それでも、多様な背景を受け入れてくれる温かな環境がありました。仕事や家庭との両立に不安があっても、安心して一歩を踏み出してほしいと思います。この研究科での学びは、自分自身を見つめ直し、その変化を実践へとつなげる貴重な経験になるはずです。

新潟県新潟市出身。2016年、事業承継を機に社会福祉法人の経営に携わる。現在は社会福祉法人颯和会本部長として、新潟県内で保育・子育て支援事業II施設の運営を担う。保育園と地域の関係性をテーマに研究を行う。

環境を理由に、自分の人生を諦めない

赤川 直美 さん

NAOMI AKAGAWA

2026年
3月修了



広島県に在住し、両親の在宅介護を続ける日々。それでも私が立教大学大学院社会デザイン研究科への入学を決意できたのは、通学生と同じ条件で、オンラインで講義を受け、学ぶことも、研究することもできる環境があったからです。

20年以上にわたり家族の介護や看取りを行う中で、多くの方が「もっと話を聞いておけばよかった」「本当はどうしたかったのだろう」と思い悩んでいることに気づきました。そんな時にエンディングノートに出会い、エンディングノート普及協会を立ち上げました。

活動をはじめて10年が過ぎ、多くの方とお会いし、お話しさせていただく中で、これまでの経験や情報を体系的にまとめてみたいと思うようになりました。これまで10年以上実践を積み上げてきました。実体験を通してお話しすることは大切です。しかし、その実践を裏付けるエビデンスが欲しいと考えるようになっていました。

入学してから1年目の秋には、在宅介護をしていた父が急逝しました。その際にも、どのような状況にあっても学ぶ機会を尊重してくださる先生方に支えていただき、無事に修了の日を迎えることができました。

私の活動のテーマは「人生悔いなし!」を全力サポート」です。だからこそ、サポートする私自身も、自分の人生を諦めたくありません。「あの時介護があったから」「地方に住んでいるから」などを理由に、自分のやりたいことを絶対に諦めたくありませんでした。社会デザイン研究科は、そんな私にかけがえのないチャンスを与えてくださいました。

また、積み上げた実践と経験に、研究を通してエビデンスが加わったことで、修了後の活動範囲はさらに大きく広がりました。現在は、エンディングノートをコミュニケーションツールとして捉え、すべての人の「人生悔いなし!」をサポートするために、「エンディングノートを社会インフラに!」という次なる目標に向かっていきます。

エンディングノートで、一人でも多くの人の笑顔が生まれる社会をデザインする。これからも、実践と研究を往還しながら進んでいきたいと思っています。

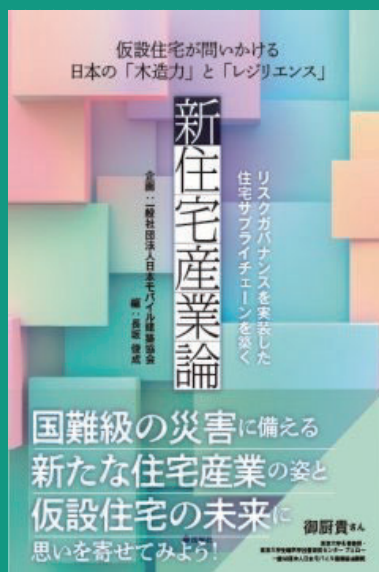
20年以上の家族介護経験をもとに、2013年にエンディングノート普及活動を設立し、2017年にNPO法人化、理事長就任。広島県福山市を拠点に「人生悔いなし!」を全力応援」を理念に掲げ、全国各地での講演や、広島東洋カープ公認ノートの企画・制作、自治体エンディングノートの活用提案などを行っている。

新刊紹介

NEW BOOK INTRODUCTION

新住宅産業論

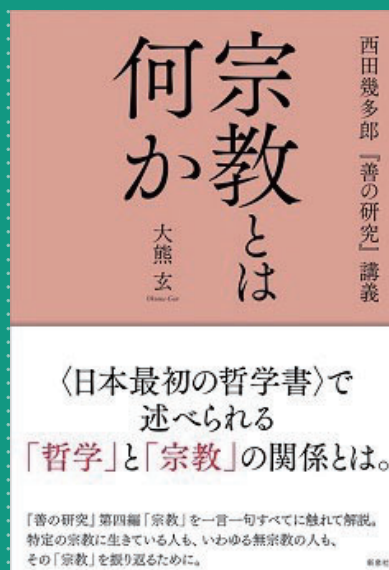
仮設住宅が問いかける日本の「木造力」と「レジリエンス」
長坂 俊成／編 一般社団法人日本モビリティ建築協会／企画
(2026年1月より「一般社団法人日本モビリティ建築協会」に名称変更)
創樹社・208ページ 2025年4月発行 定価・1,980円(税込)



転落男性論 孤立、暴力、ホモソーシャル
西井 開／著 金剛出版・240ページ
2026年3月発行 定価・3,300円(税込)

宗教とは何か 西田幾多郎『善の研究』講義

大熊 玄／著 新泉社・208ページ
2026年4月発行 定価・2,530円(税込)



純粋経験とは何か 西田幾多郎『善の研究』講義
大熊 玄／著 新泉社・256ページ
2026年4月発行 定価・2,750円(税込)

2025年11月30日(日)

会場：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム
主催：立教大学大学院社会デザイン研究科
共催：立教大学社会デザイン研究所

映画『杳かなる』公開上映会&シンポジウム「対話するケアを求めて～つながりとALS」

映画『杳(はる)かなる』は、ALS(筋萎縮性側索硬化症)患者とその周囲の人々の日常に密着したドキュメンタリーです。進行性の難病であるALSの患者は、生きていくために「他者」によるケアが不可欠であり、そのコミュニケーションの方法は、そのステージによって刻々と変化していきます。映画では、ALS患者と介護者(ケアする側・される側)という対比が前景化しつつも、お互いがひとりの人間であるという事実が強く描き出されています。上映後には、監督である穴戸大裕氏と、終活やライフエンディングの専門家である星野哲先生、哲学の教員である大熊による鼎談、その後フロアとの対話が行われ、映画をふまえつつ、ひろく人間にとって対話・コミュニケーションとは何かが話し合われました。(大熊 玄)



2026年3月5日(木)・6日(金)・7日(土)

会場：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム、6日のみM201
主催：立教大学大学院社会デザイン研究科、立教大学社会デザイン研究所
共催：JSPS科研費24K15499 (基盤研究C「ラファエル・レムキンのジェノサイド論を再検討する：レムキンの日本研究に着目して」代表者：長 有紀枝)

連続講演会

「ラファエル・レムキンのジェノサイド論と日本」

米国からディヴィッド・クロウェ (David M. Crowe) イーロン大学歴史学・法学名誉教授を迎え、玉田 大京都大学大学院法学研究科教授、パール・バック研究者佐川陽子氏、稲角光恵日本大学国際関係学部教授、南 博前外務省駐オランダ全権大使、本研究科の長がジェノサイドという言葉を生んだユダヤ系ポーランド人法学者レムキンのジェノサイド論と日本との関係についてさまざまな角度から議論した。赤根智子国際刑事裁判所 (ICC) 所長からビデオメッセージもいただいた。(長 有紀枝)

2026年3月13日(金)

会場：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム
主催：立教大学大学院社会デザイン研究科立教大学社会デザイン研究所
共催：JSPS科研費23K21809-I

公開講演会

「紛争後社会における集団墓地調査と法医学の役割 ～M.ジュリッチ博士をお迎えして」

マリヤ・ジュリッチ (Marija Đjurić) ベオグラード大学医学部人体解剖学教授をお迎えし、国際刑事裁判のための証拠収集や平和構築のための真相究明を行う紛争地の法医学の役割について講演いただいた。本研究科の長が司会を務めた。(長 有紀枝)

2026年4月25日(土)

会場：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階カンファレンス・ルーム
主催：立教大学大学院社会デザイン研究科、立教大学社会デザイン研究所

公開講演会

「ファクトチェックを実装した新たな情報リテラシー教育」

ネット上での偽・誤情報や根拠のない言説や主張の拡散は、社会の混乱と分断を進め、民主主義を支える選挙や人命に関わる災害対策、人権侵害等にも影響を与えている。情報や言説の真偽を検証するファクトチェック(検証行動)の重要性が高まりつつあり、そのためには情報を見極めるリテラシーの向上が不可欠となる。講演会では、大学の研究者の他、NPO、NHK、新聞社による情報リテラシー教育の実践報告を踏まえ、効果的なファクトチェックの在り方について討論した。AIに検証を頼るとハルシネーションのリスクが生じることや、報道や公的情報自体の信頼性が問われるなかで、真偽を見極める教育に加え、真偽不明の情報を発信・拡散に対する倫理教育も求められる。(長坂 俊成)



Hasanuddin University Delegation Visits Rikkyo University

On July 15 and 16, Rikkyo University welcomed a delegation from Hasanuddin University (UNHAS), one of the largest and most prestigious universities in Indonesia. This visit followed the signing of a Memorandum of Understanding (MOU) between the two institutions in 2025. On the first day, Indonesian MSDA student Pandu, alumnus Rayhan, and their friends warmly welcomed Professor Gita Susanti, Head of the Master of Public Administration Program, and Professor Andi Ahmad Yani. The meeting was held to inform the UNHAS delegation of Indonesian students' experiences at Rikkyo and of the Indonesian student associations in Japan. Following a campus tour that included the library and exhibition hall, Professor Yani delivered a special lecture titled "Walking on the Bright Side of Crisis: A Positive Public Administration (PPA) Approach to Community-Based GBV Services" to MSDA students. The audience listened intently and engaged actively in a lively Q&A session.



New Students Joined the MSDA Course

The campus enrollment ceremony took place on September 18th, 2026, and the MSDA course welcomed eleven new students. These students came from China, Taiwan, Myanmar, Nigeria, Chile, Colombia, Samoa, and Ukraine.

研究科のイベント案内

進学相談会は6月、11月の2回を予定。その他模擬授業や公開講演会を実施しています。詳細は研究科公式サイトでお知らせします。

入学試験概略（詳細は入試要項を確認）

博士課程前期課程

入学定員	50名（すべてのコース・試験区分の合計）
入学試験実施時期	秋季と春季の2回
対象	出願資格を有する者、もしくは本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者。 （注）後者の出願資格を得るためには、出願に先立ち、出願資格審査を受ける必要があります。
選考方法	書類審査、筆記試験、口頭試問の成績を総合的に評価して行います。
※入試日程や試験区分は大学のWebサイトで公開される入試要項をご覧ください。入試要項は6月上旬頃に公開予定です。	

博士課程後期課程

入学定員	5名
入学試験実施時期	春季のみ
その他	出願資格は博士課程前期課程と異なりますので、入試要項に掲載される内容をよくお読みください。
※入試要項は6月上旬頃に公開予定です。	

前期課程・後期課程とも、詳細は研究科公式サイトでご確認ください。

研究科入試に関するお問い合わせ

立教大学独立研究科事務室 cde-ad@rikkyo.ac.jp

発行／立教大学大学院
社会デザイン研究科
発行人／大熊 玄
編集担当／川本 彩花
発行日／2026年10月16日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報を研究科公式サイトでお知らせしています。
 社会デザイン研究科 公式サイト
<https://sds.rikkyo.ac.jp/>



社会デザイン研究科
X
https://x.com/rikkyo_sds

